

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

IX—3

1982

滋賀県教育委員会

財団 滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

IX—3

1982

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

序

県下のは場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査はすでに9年目を迎え、種々の資料や成果が蓄積されているところです。

ところで、は場整備事業区域も年々増加の一途をたどり、それらの工事と併行して発掘調査が円滑に実施できるよう銳意努力しておりますが、そうした中で得られた成果を公開し、地元へ還元していく作業もまた重要な責務と考えます。

この報告書は湖北地方において昭和56年度に実施した調査結果をまとめたものでありますが、近江の歴史研究の一助になれば幸いです。

最後に調査にあたり御助力を頂いた関係者ならびに関係諸機関の方々に感謝の意を表します。

昭和57年3月

滋賀県教育委員会事務局

文化部文化財保護課

課長 外 池 忠 雄

例　　言

1. 本報告書は、湖東地方における昭和56年度県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財事前調査の成果である。
2. 調査は滋賀県耕地建設課の依頼により、滋賀県教育委員会の指導のもとに財団法人滋賀県文化財保護協会が実施したものである。
3. 本書には同郡安土町小中遺跡及び蒲生郡日野町内池遺跡の2遺跡を収載した。
4. 調査は滋賀県教育委員会文化財保護課技師近藤滋が担当し現地調査は小中遺跡を(財)滋賀県文化財保護協会技師松沢修、内池遺跡を同嘱託山本一博が実施した。
5. 本報告書は近藤が編集し、近藤、松沢、山本が整理執筆し、それぞれ文末に文責を明記した。

第1章 蒲生郡安土町小中遺跡

目 次

序

例 言

第 1 章 蒲生郡日野町内池遺跡	1
1 はじめに	1
2 位置と環境	2
3 遺構について	2
4 遺物について	9
5 おわりに	13
第 2 章 蒲生郡安土町小中遺跡	15
1 はじめに	15
2 位置と環境	15
3 遺構について	17
4 遺物について	22
5 おわりに	26

図版目次

第1章 内池遺跡

- 図版1 1 Fトレンチ全景(東より)
2 Fトレンチ全景(西より)
- 図版2 1 SD5遺物出土状況(24)
2 SD5遺物出土状況(16ほかA)
- 図版3 1 Hトレンチ全景(西より)
2 HトレンチSD1検出状況
- 図版4 1 Jトレンチ全景(南より)
2 JトレンチSK3検出状況
- 図版5 1 JトレンチSBA1検出状況
2 JトレンチSBB1検出状況
- 図版6 1 Jトレンチ(1~9)出土遺物
2 Hトレンチ(10,11,15)Fトレンチ(18,23,28)出土遺物
- 図版7 1 Hトレンチ(12~14)Fトレンチ(16,17,19~22,24~27)出土遺物

第2章 小中遺跡

- 図版8 1 溝内遺物出土状況
2 同上
- 図版9 1 溝内遺物出土状況
2 同上
- 図版10 1 溝内遺物出土状況
2 同上
- 図版11 1 溝内遺物出土状況
2 トレンチ土層
- 図版12 1 掘立柱跡検出状況
2 掘立柱跡検出状況
- 図版13 1 溝内下層遺物出土状況
2 溝跡検出状況
- 図版14 1 溝内土層堆積
2 溝内検出状況
- 図版15 1 掘立柱建物跡検出状況
2 掘立柱跡内礎板用土器検出状況
- 図版16 出土遺物
- 図版17 出土遺物
- 図版18 出土遺物

挿図目次

第1章 内池遺跡

第1図 遺跡遺跡	1
第2図 トレンチ配置図	3
第3図 F・H・J トレンチ平面図	4・5
第4図 H トレンチ SPI 実測図	6
第5図 J トレンチ SBA-1・SK 3 実測図	6
第6図 J トレンチ SBB-1 実測図	8
第7図 F トレンチ出土遺跡実測図	11
第8図 J・H トレンチ出土遺跡実測図	12

第2章 小中遺跡

第1図 位置図	16
第2図 安土町小中遺跡トレンチ配置図	18
第3図 住居跡平面図(1)	19
第4図 グリッド平面図(1)	20
第5図 グリッド平面図(2)	20
第6図 グリッド平面図(3)	21
第7図 遺物実測図(1)	23
第8図 遺物実測図(2)	24
第9図 グリッド土層図	25
第10図 SB 0 2 壁穴式住居跡実測図	28
第11図 トレンチ土層図	折込
第12図 トレンチ土層図	折込
第13図 トレンチ土層図	折込

第1章 蒲生郡日野町内地遺跡

1. はじめに

日野東部必佐地区里口工区の県営は場整備に伴う今日の調査は、古く、出雲川の改修工事や必佐小学校造成等に際し採集された縄文土器、弥生土器等の存在が知られていたことから、始めてこの遺跡に調査のメスを入れたもので、遺跡の遺存状況、範囲等を明らかにすることを第一義として実施した。調査に際しては日野町役場、日野町教育委員会をはじめ



第1図 遺跡位置図 S-1/20,000

め、地元内池の関係各位に多大のご協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

2. 位置と環境

今回報告の内池遺跡は、蒲生郡日野町大字内池地先にあって出雲川の左岸に存在する。現状では内池集落の北方、日野町立必佐小学校隣の水田地帯がその範囲と言えそうである。しかしその性格付けについては、過去、遺物が採集されたにとどまり、遺跡範囲等も含め不明な点が多い。

さて靈峰綿向山を東にいただく日野町の町域は、かなり拡大である。しかし、町の東辺に並ぶ竜王山、綿向山、猪の鼻岳の山岳部はさほど広くはなく、標高300m以下の丘陵がその大半を占める地から布引、日野、水口の三つの丘陵が、東南から北西に横切っている。そしてその丘陵間には二つの沖積平野が展開しているが、それはそれぞれ佐久良川、日野川の沖積作用によるものである。日野町内の集落はまさに、この二つの沖積地を中心に丘陵部深く侵入する網状の沖積地に立地している状況にある。現在の日野町の中心街が、この沖積地が最も広くなる部分に立地しているのも当然のことであろう。

さてこの空間に遺存する遺跡であるが、現在のところ84ヶ所で確認されている。しかし大部分地図上「点」で把握されているもので、範囲ですら不明であるものが多い。過去本格的な調査のメスが入った遺跡は、7世紀初から中頃にかけての木棺直葬の古墳を検出した小御門B遺跡、平安末期から中世にかけての積石墓を確認した小御門C遺跡、多量の藏骨器の出土を見た西明寺遺跡・大谷遺跡のみであることからも、今後の調査に大きな期待が寄せられる状況である。

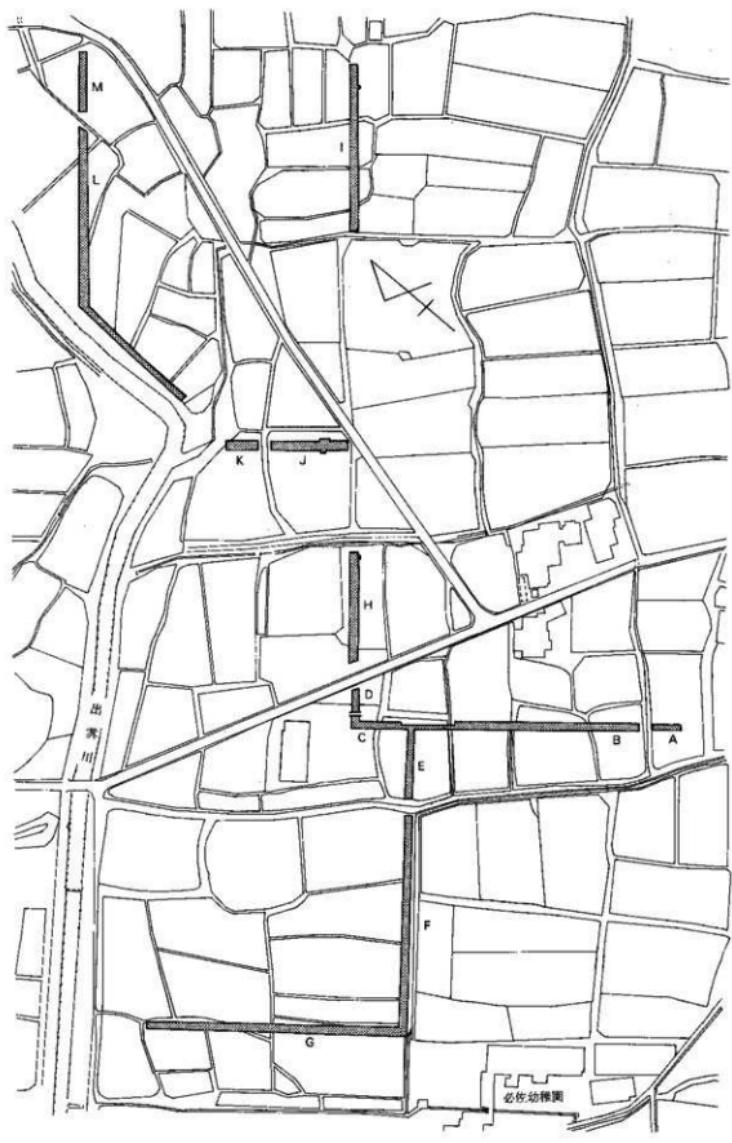
3. 遺構について

ほ場整備の工事自体には、現水田面より施工後水田面の方が低くなる予定の部分もあったが、とりあえず排水路施工予定地にトレーニングを設定し調査を開始した。それぞのトレーニングは、調査時設定された順にA～Mのアルファベットを冠して呼ぶこととする。

A～Kのトレーニングについては、それぞれ多少の差はあるものの遺構、遺物の出土、検出をみている。しかしL、Mの両トレーニングについては、現出雲川沿いに設定したもので完全に出雲川の旧河道と一致していたため、砂礫層の堆積を認めたのみで遺構、遺物の発見はなかった。

さてA～Kで検出された遺構は、溝跡、井戸跡、竪穴住居跡、建立柱建物跡、土壌などであるが、全体的にその遺存状態は良好であるとはいひ難いものであった。その上、A～C、E～G、I、Kトレーニングでは湧水がひどく、調査に多大の制約を加えるものであった。

次に遺物であるが、全体ではコンテナ5箱とけっして多い出土量ではなかった。しかしその内容は、過去採集された遺物にはなかった年代巾をもつたものであった。古いものは弥生土器、新しいものは近世陶磁器といった具合である。



第2図 トレンチ配置図

今回は最初にもおことわりしたとおり概要報告ということで、現段階までに把握した調査のアウトラインを報告することにとどめ、今後実施されるであろう「面」的調査の結果とともにその詳細報告は後稿に渡りたいと思う。したがって、以下に記述するものは内池遺跡の内容把握のため意図的に選び出した遺構、遺物の説明であることをあらかじめおことわりしておく。

F トレンチ

全長約80m このトレンチからは、10条の溝と10基の井戸を検出している。

溝は、ほぼトレンチ方向と類似する流れをもつもので、巾は30~70cmを測る。深さは、20cm程度が主流で比較的浅いものである。遺存状況が良好でないためか、トレンチ東端部より約25m 地点で溝は一旦消滅し、その後約5 m の間隔をあけて再び溝が検出された。溝どうして切り合い関係が認められるものもあるが、ほとんどはほぼ同時期に機能していたように観察された。

現状の畦畔に接して段られたトレンチ内で、ほぼ方向を同一にした溝群であることから、水田耕作用排水溝であったものであろうか。

井戸については、直徑約1 m 強の掘方を持つものであるが、湧水が激しいことと地山(とくにトレンチ東寄りは砂礫層)が軟柔なことで完掘し得たものはなかった。しかし上記溝との切り合いは、すべて井戸の方が切り込んでいることや、最近まで使用していた話などがあり、どれも近世以後のものであると考えられる。

F トレンチにおける検出遺構は、特に特異性を持つものではなかったが、出土遺物については興味深いものがあった。最近県下でも出土例が増加してきた瓦器の出土をみたのもその一つである。特に SD 5 からの出土遺物(16~28)は、一括遺物としてとらえることが可能で、今後の調査研究に期待がかかるところである。

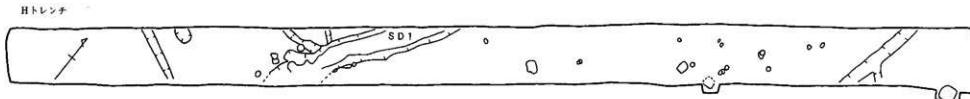
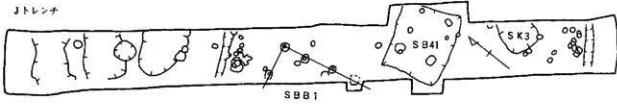
H トレンチ

若干のピットと溝を検出している。

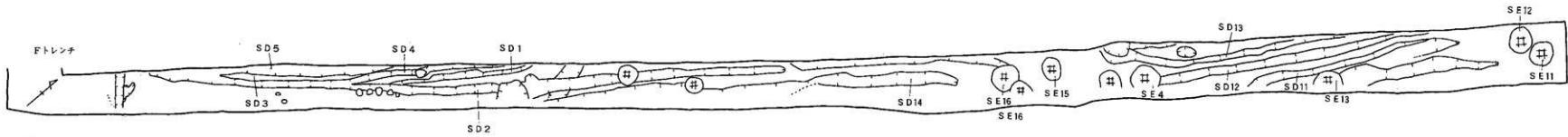
その中で SDI は、巾約1.5m、深さ約0.3m を測る溝であり、東に振るもの割合南北方向に近い流れをもつものである。西寄り部分の西側の肩部は、2 m 近い巾の緩斜面となつておらず、巾0.3m と0.2m の小溝が遺存していた。この2本の溝は、断面観察、堆積土の状況から SDI と同時に存在して、これに合流するものであったと判断している。

堆積土は全体的に砂質が強い傾向にあり、出土遺物も砂質土中に集中して出土した。特に遺構面に近いレベル、つまり堆積土の上層から多くの遺物が出土している。

なお、SDI の東側で検出された溝は暗渠排水施設で、直径12cm程度の竹を管として利用



6 10M



第3図 F・H・Jトレンチ平面図

同じく竹の枝といっしょに埋設されていた。その年代は比較的新しい時期のもので、埋設したことを記憶する人もあるという。

Jトレーニチ

Hトレーニチの東方約40mの地点で、Hトレーニチと直交する方向に設けたトレーニチである。その北端は1.2mの標高差をもって落ち込んでいる。つまり低くなった部分が出雲川の氾濫原ということである。

このトレーニチからは、竪穴住居跡(SBA 1)、掘立柱建物跡(SBB 1)、土壌(SK 3など)が検出されている。

SBAI：トレーニチ中央より、やや南寄りから検出された。東西約3.9m×南北約3.3mを測り、隅丸方形プランをもつものと考えられる。

主な施設としては、北辺の東寄りの部分にカマドが付設されていたらしい。焼土が残存していること、馬蹄形を呈すると考えられる掘込みがあることなどが、その傍証となる。他に主柱穴となるピット、ほぼ中央部にみられる落ち込みなどがあげられる。貯蔵穴、壁溝などは検出するに至られなかった。

土師器鍋(8)、須恵器杯身(9)が出土している。

SBB1：SBAIの北側、Jトレーニチのほぼ中央部で検出している。東西2間以上×南北3間以上の規模をもつもので、調査対象区域外に一部が遺存しており全容は明らかでない。

柱穴の規模は、掘方約40cmの不整円形を呈し、柱穴は径約10数cmの円形を呈している。柱間距離は、1.3・1.4・1.7mを測る。

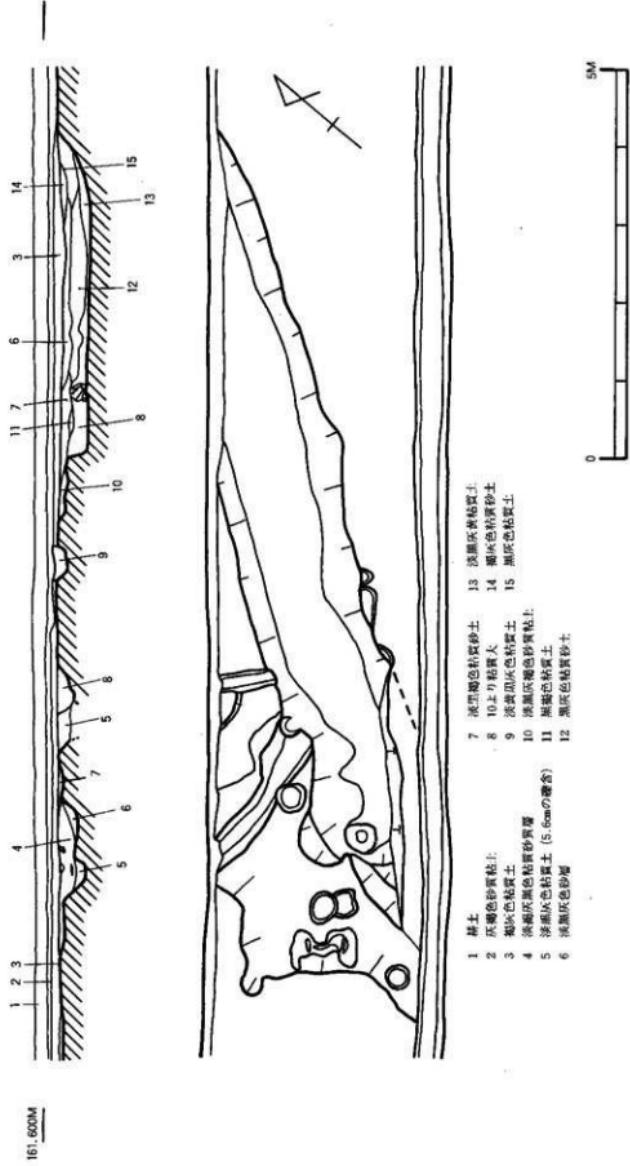
その方向は、先のSBAIと非常に類似している。あるいは、同時に存在していた可能性も考えるものである。

特記すべき遺物の出土はない。

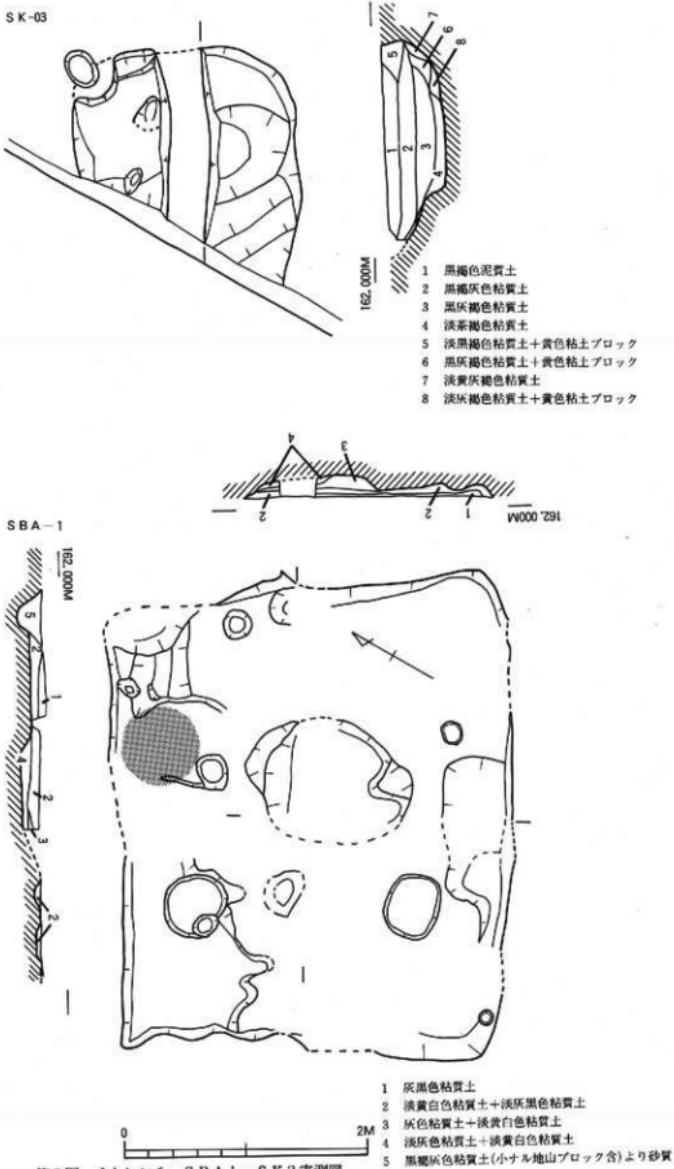
SK 3：SBAIの南で検出されている。南北約1.9m×東西1.9m以上を測る方形気味のプランをもつ。深さ約0.5mである。

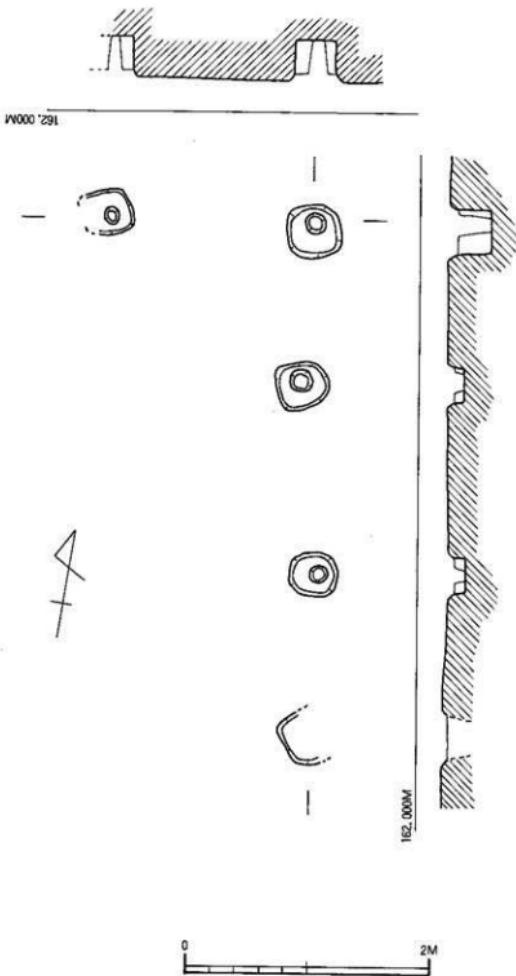
堆積土中1～3には、炭化物が含まれていた。

比較的多くの遺物が出土しているが、これも1～3に集中する傾向がみられた。しかし、完形に復元できるものはない。その主なものは、弥生土器(1～6)と磨製石鏃(S 1)である。



第4図 HトレンチSDI 1実測図





第6図 JトレンチSBB1実測図

4. 遺物について

弥生土器（1～6）

器種としては壺（1～4）と甕（5、6）がある。

1は、外反する頸部から短く垂直方向に立ち上がる口縁部に続く。立ちあがり外面には刻目文が施される。内面は粗い横方向のハケ目調整後、ヨコナデを施しており、ハケ目が残る部分がある。外面もおそらくハケ目調整を行なったであろうが、ヨコナデ痕のみが観察される。2は、内彎する口縁部の外面に、凹線文を施すものである。内外面ともヨコナデで仕上げているが、その前段階で、内面は横方向のハケ目、外面は斜方向のハケ目で調整する。3は、外上方に真直のびる口縁部である。外面には、2本1セットの櫛描平行線文が施されている。4は大きく外反する口縁部をもつもので、その端部には刻目文がある。また内面には、細いヘラ状工具で5本1組の沈線文を施す。復元すると口縁部全体では、18組施文する計算となる。

詳細はまだ不明であるものの、内池遺跡の弥生土器には、5・7にみられるように櫛描平行線文や波状文の他に、ヘラ描沈線文が目につく。あるいは、当遺跡の特徴かもしれない。

5・6は、いわゆる受口状口縁をもつ甕である。ともに立ちあがり部分は、内傾、内彎しており、外面の上半はヨコナデ、下半は斜方向のハケ目も共通している。6の頸部には、刻目文が施されている。

弥生時代中期後半の所産であろう。

土師器（8）

鍋である。「く」字に屈曲する口縁部をもち、復元口径は40.2cmを測る。内外面とはハケ目が残る。

須恵器（9）

短く内傾した立ちあがりを持つ杯身である。復元口径10cmと小型化している。

8とともにSBA 1より出土しているが、ともに7世紀初期頃の年代が与えられよう。

土師器（10・11）

10は杯、11は皿であろうか。10の底部と体部の境は丸味をもち、口縁部はやや外反気で器壁が薄くなる。口縁部と体部に施されたヨコナデは強くなく、底部外面は未調整のままである。

須恵器（12～15）

12は、径12.4cmと小型の杯蓋である。宝珠形つまみは、かなり扁平で、内外面のヨコナデも雑である。特に外面は、粘土に中空部分が認められる所もある。

13、14は無高台の杯身で、底部と体部の境は屈曲して明確である。Bの底部外面には、墨書きが認められる。

15は皿である。底部はわずかに丸味をもつ。復元口径は15.4cmを測り、他の須恵器に比べ、比較的丁寧につくられている。

10～15は、HトレンチのSD1より出土したものだが、おおむね8世紀後半の遺物といえる。

土師器 (16～23)

16～22は皿であるが、口径14～15cm程度の大皿と同じく8～9cm程度の小皿の二種類ある。17の口縁端部が方形になる字からは、すべて丸くおさめている。18の口縁部外面には、通常のヨコナデのほか、端部に幅の狭いヨコナデがみられる。小皿の底部外面には、ユビオサエ痕が見立つ。

23は羽釜である。復元口径は27.2cmを測る。内側する口縁部をもつものだが、体部はおそらく球形を呈するものであろう。肩部に巾の狭い鍔が貼り付けられている。口縁部外面はヨコナデで、内面には凹面が帯状に巡っている。外面の一部と内面には細いハケ目が認められる。

黒色工器 (24)

器高指数34と扁平な形態をもつものの、体部はかなり内側する形状を示す。口縁端部内面には一条の沈線があり、断面三角形の底い貼付高台が付く。ヘラミガキ、暗文については、遺存状態不良のため不明である。

24の最大の特徴は、いわゆる近江型黒色土器に見られる器壁の厚さに比べ、非常に薄いことである。底部などは、2mmの厚さである。手法についてははっきりしないが、後述する25～27の瓦器との関係が考えられる資料である。

瓦器 (25～27)

3点とも塊であるか、浅い器形をもつものである。断面三角形の低い貼り付け高台、口縁端部内側の沈線、比較的粗い内面のヘラミガキ、内面見込みの螺旋状暗文、体部外面に目立つユビオサエ痕、口縁部の強いヨコナデ、外面にヘラミガキが見られないなど共通している。ほぼ13世紀。

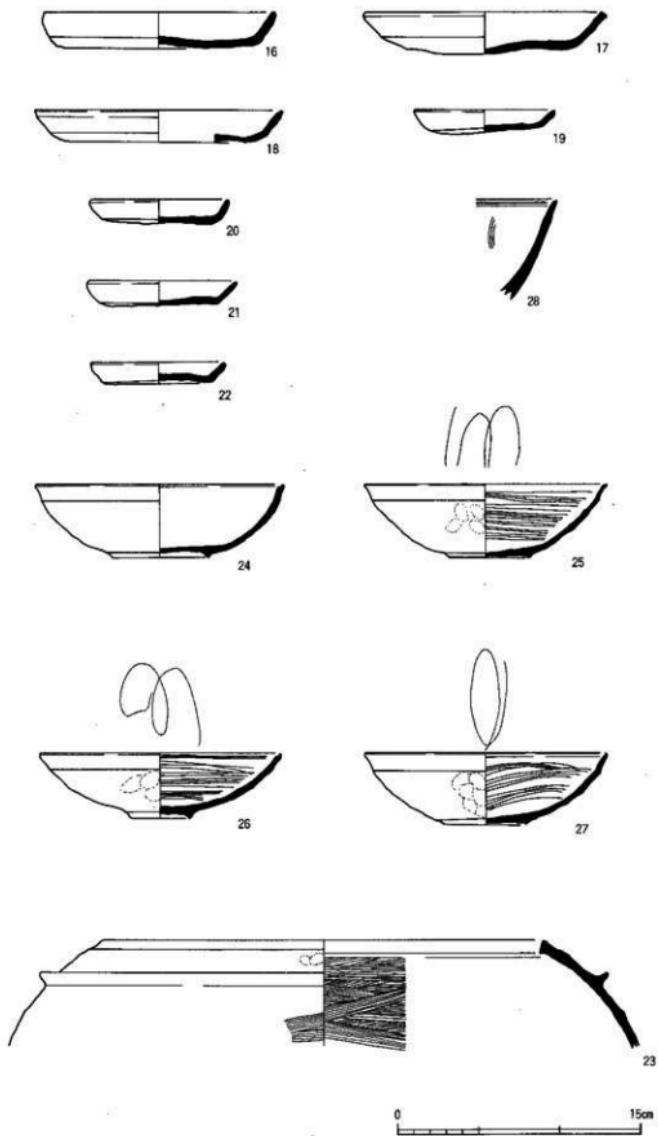
青磁 (28)

黄味かがった色調を呈するもので、同安窯系塊であろう。口縁端部内面に三条の平行線と、体部内面にも平行線文が施されている。

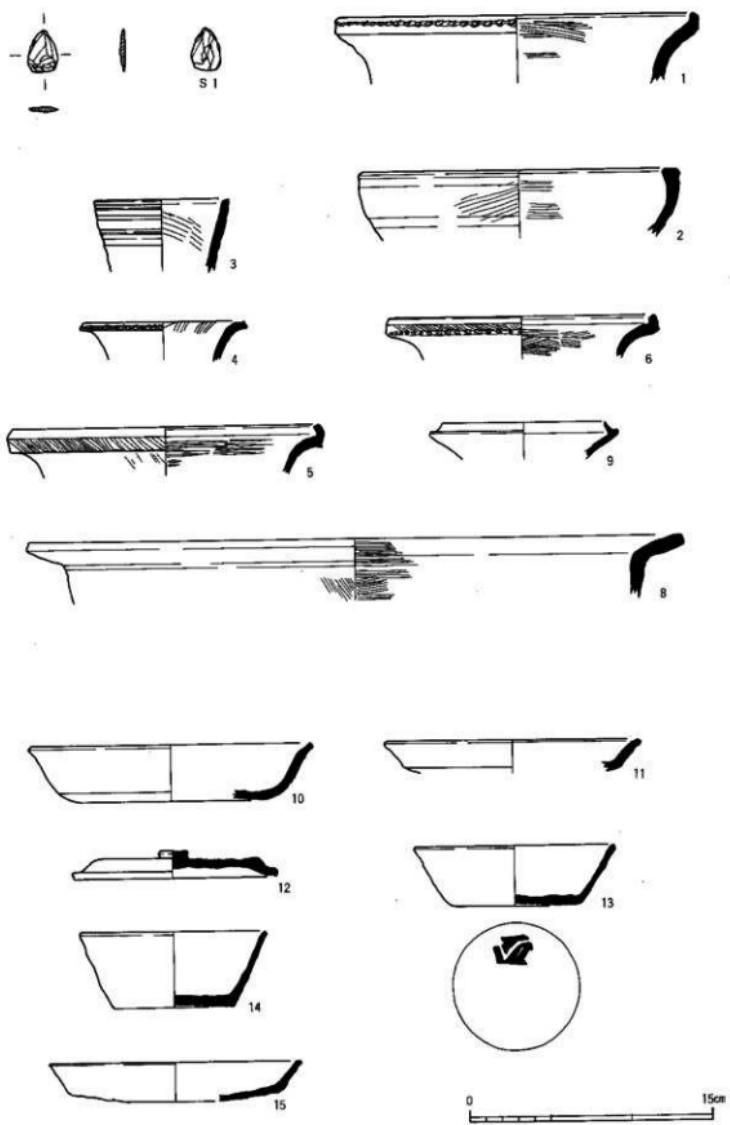
磨製石鎌 (S1)

一部欠損するがほぼ原形に近く、無茎で基部は平基式である。長さ2.6cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ1.4gを測る。最大幅は下位にあり、全体に丸味をおびている。明瞭な鎌はなく、扁平な感じがある。両面ともにその凹部に自然面を残し、先端部、側辺の数ヶ所に使用痕と考えられるリング状欠損部がある。

材質は、粘板岩系石材である。



第7図 Fトレンチ出土遺物実測図



第8図 J・Hトレンチ出土遺物実測図

5. おわりに

以上紹介した遺構、遺物は、大きく三時期に大別することができる。まず第1期は、弥生時代中期後半で、第2期は7～8世紀、第3期は13世紀代である。

まず第1期の遺構は、Jトレンチに限られて検出されている。また遺物の出土状況も、これに類似した状態である。性格付けのはっきりした遺構はないものの、SK3の遺物出土量もそれ程乏しくなく、付近に集落等の存在も考えられる。

第2期には、竪穴住居も存在しており、7世紀初の頃は、確実に人々の生活があったことが認められた。ただその集落の存在期間は、竪穴住居跡が1棟しか検出されておらず、不明である。しかし、Hトレンチ検出のSD1出土の遺物が、量的に豊富なこと、及びその中に墨書き土器などが含まれることから、この頃までは集落が存在していたようである。いずれにしても、集落存続上限、下限とも今後の調査結果に期待が寄せられるところである。

第3期になると、現状で見られる水田区画がある程度形成されていたようである。今回検出をみた溝群は、この水田耕作に利用したものと考えている。またこの溝群から出土した瓦器は、今後近江地方でどのような分布を示し、どのように展開していくかを探る一つの手懸りになりそうである。

今回の報告は、先にもおことわりしたように時間等の制約によって、調査結果のアウトラインを記載したにとどまっている。今後の整理作業の中で、新たな発見も数多く生まれることは想像に難くないものの、今報告した概要を大きく否定するものはないはずである。

従来縄文土器、生土器採集地として認識されていた内池遺跡が、弥生時代中期後半、7～8世紀、13世紀の3時期、明確に人々の生活の場となったことが判明したことは、今回の調査の最大成果である。

また特に第2・3期については眼前に見える出雲川対岸の丘陵上に立地する小御門B・C遺跡の時期と一致することも同様である。つまり墓域としての古墳、古墳群と被葬者の生活の場と考えられる両者の関係は、確認できて当然ではあろうが、残念ながら比較的確認例の少ないもので、しかも時代の異なる間にわざわざ、両時期とも明らかになつたということは、実に無駄のない調査といえる。しかし一方で残念なことは線的調査が主であったため、両者の、より具体的な関係を裏付けるような結果を得るまでには至らなかつた。今後の面的な周辺調査に期待したい。

(山本一博)

第2章 小中遺跡

1はじめに

当該調査は県営ほ場整備に先き立ち実施した調査で、ほ場整備事業にかかる調査としては安土町内で最初のものであった。このため事前調整として、次年度以降の調査区についても合せて基本の方針を考えることとし、特に次年度対象区域は式内沙々貴神社の道路を隔てた東向いにあり、かつ台地にあることから、夏期は当該年度対象区の本調査を実施し、冬期は次年度対象区の試掘をすることで調査を実施した。

調査を実施するにあたっては安土町役場、安土町教育委員会をはじめ地元の多くの関係各位の協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

2. 位置と環境

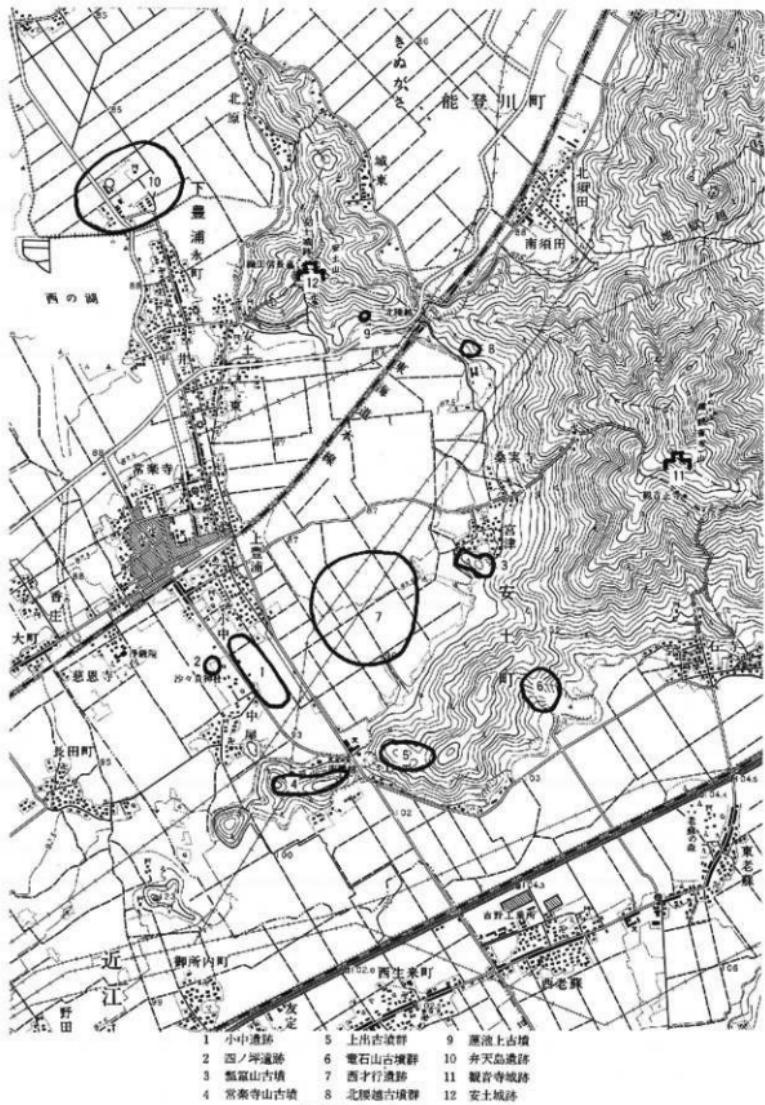
国鉄東海道本線の安土駅から安土城とは逆の南0.5kmに古代蒲生郡・神崎郡の郡司となつた佐々貴山君を祀るとされる式内沙々貴神社の社叢がある。小中遺跡は、この森の東に接した一帯にあり、南の常楽寺山から、現安土町の市街地へ続く台地東辺に立地している。

今回の調査地はこの台地南端の一部が西へ谷状に大きくなり込んだ南側斜面から東側斜面および台地南端上部で実施したもので、南側谷部とは比高3.2m、東側台地据部とは2.4mの比高が見られた。

当遺跡周辺の歴史的環境としては、最も著名なものとして東1.2kmに県下で最大、最古の前方後円墳である史跡瓢箪山古墳がある。また、南の常楽寺山の尾根上には5世紀中頃以降、6世紀後半まで尾根筋のみを占地した計6基からなる常楽寺山古墳群があり、特に1号墳は形象埴輪を持つ前方後方墳、6号墳は円筒埴輪を持つ円墳と同辺部の他の後期古墳群とは若干様相を異にした群構成が見られる。また小中遺跡と同時期の集落跡としては沙々貴神社の西側から北にかけて四ノ坪遺跡があるが、あるいは、その位置関係から考えると同一遺跡としての可能性もある。さらに当遺跡の南東2.0kmにあって瓢箪山古墳の背後の観音寺山中腹には天武天皇の創建伝承を持ち、重要文化財「桑実寺縁起絵巻」で著名な桑実寺がある。そして当寺は南都薬師寺の別当職として聖武天皇が薬師寺に施入した蒲生郡豊浦莊を管理していた。その豊浦莊が当安土町内に比定され、現在の安土町下豊浦、上豊浦付近と考えられている。

この他、桑実寺の位置する観音寺山には佐々木六角氏の居城観音寺城跡が、また歴史上に当地の地名を残した織田信長の安土城と、小中遺跡周辺は、ある意味では各時代にわたり常に歴史の表舞台に登上した遺跡群の集中する地域として注目される。

(近藤 濩)



第1図 位 置 図

3. 遺構について

調査はほ場整備事業の設工計画に合せてトレンチを設定した。

第1トレンチは県道沿いに設定した、ほぼ南北方向のトレンチで、夏期施行区域の部分、特に台地南端部では大部分が西へ入り込む谷部にあたり結果としては遺構を検出できなかつた。ただトレンチ北端の台地上部では小規模な柱穴状ピット群の他、溝跡などが検出された。ただピット群については埋土内に小片ではあるが灯明皿片が見られたことから中世以降のものと判断された。

第2トレンチは第1トレンチにT字型に設定したもので県道を西端とし、東へ約100mのトレンチであるが、ほぼ東の半分は、ほとんど遺構を検出することはできなかつた。これに対して西半分はトレンチ幅以上の幅を持つ川跡で、その内部に大量の土器群を遺存させていた。

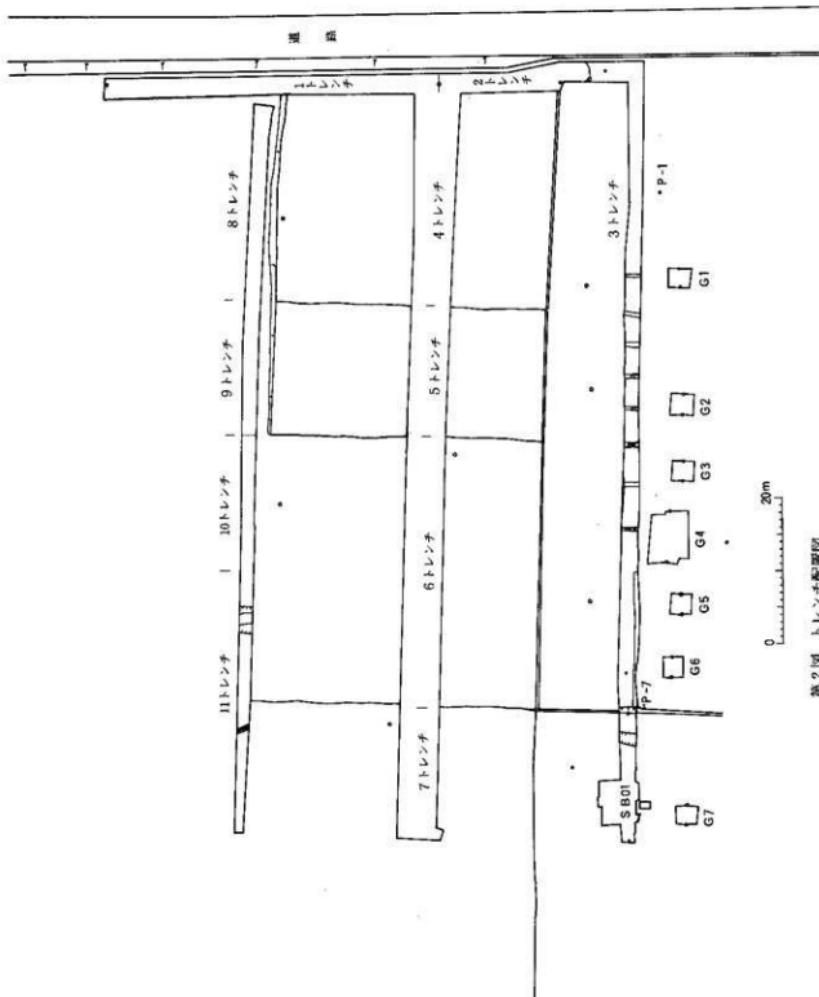
これらの遺物は主に土師器で、日常的な用器の他、非日常の用器、例えば朱塗りのものなどの他、手捏土器も多量に出土している。また、滑石製模造品も出土している。他に古手の須恵器も一部混在する。こうした、大量の土器の出土や非日常の祭器とみられる遺物の出土からみて、この川跡に於いては水辺の祭祀が行なわれていたと考えられる。

第3トレンチ、本トレンチでは小規模なピット群の他、溝跡が多數確認されている。いずれも小規模な調査であるためその性格、規模などは不明であるが、恐らく方形周溝差の一部であろうと考えている。また、本トレンチの最北端で住居跡(SB01)を確認、検出した。住居跡は隅丸で一辺約5m前後であり、竈はなく、貯蔵穴がその北辺中央にある他、柱穴も2本を確認したのみであるが、壁沿いに壁溝がめぐらしてある。なお、本住居跡の東壁部には一部に炭化物が存在していた。出土造物も殆んどないため時期の特定は難しいが、先の第2トレンチの遺物群と大差ない時期のものとみている。

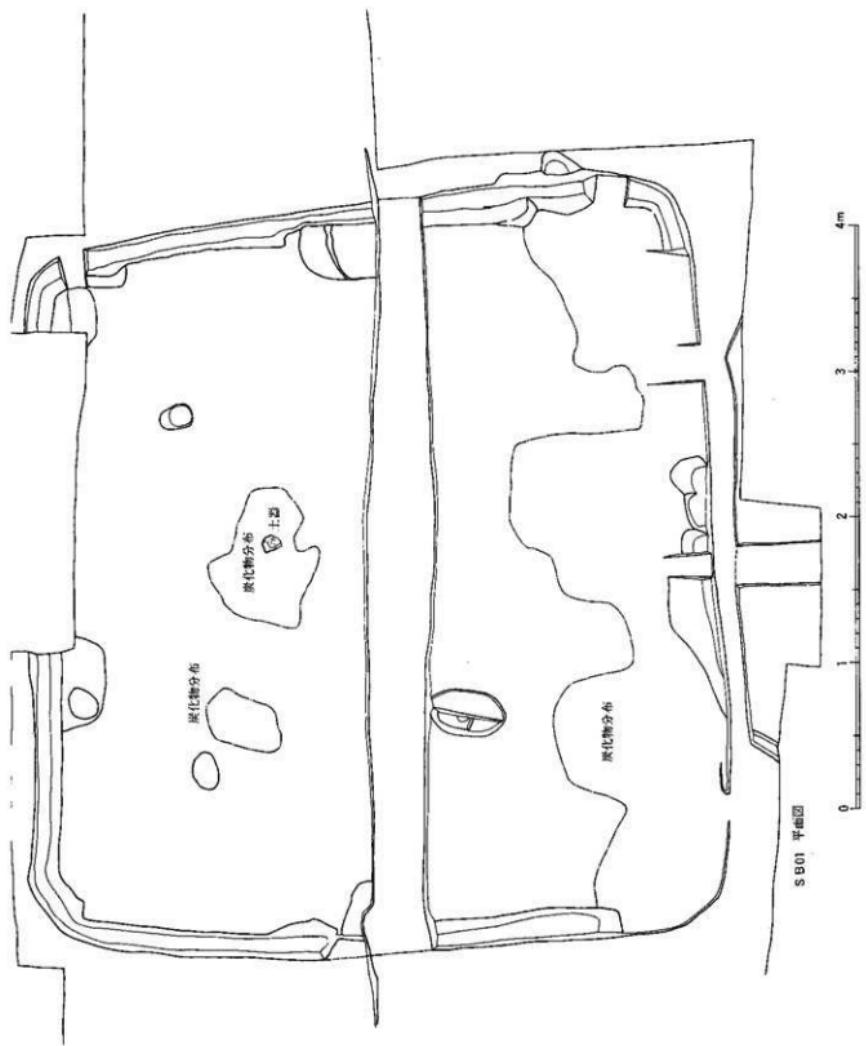
以上のトレンチの他、3トレンチの西側の水田に1~7の小グッドを設け調査を行つた。その結果、第4グリッドから住居跡(SB02)を検出した。第3~6グリッドにかけては稠密に遺構が存在し、特に、この第4グリッドは鎌倉期に至る生活痕跡が重複して存在していた。

住居跡は4m×3.2mのやや長方形のもので隅丸型であり、その南東部に貯蔵穴が存在する他、一部に壁溝がある。その他の施設は先述の通りより新らしい遺構によって破壊されており不明だが、竈は当初からないものとみられる。

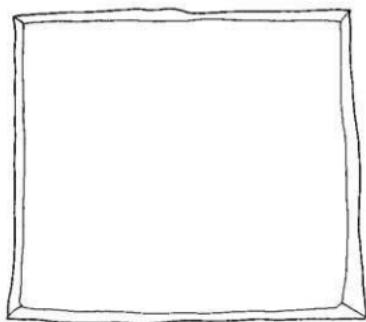
また、第6グリッドでは小規模な土壙がみられたが、これは恐らく墓跡と推定している。



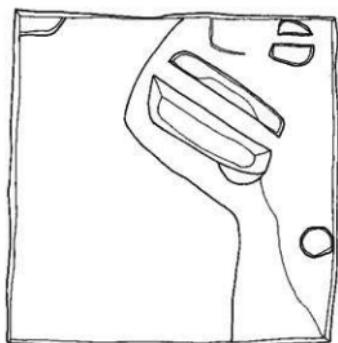
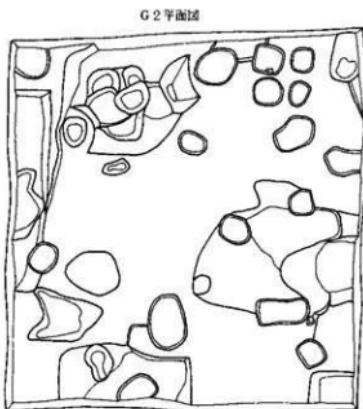
第2図 レンチ配置図



第3图 建国路平立面图(1)

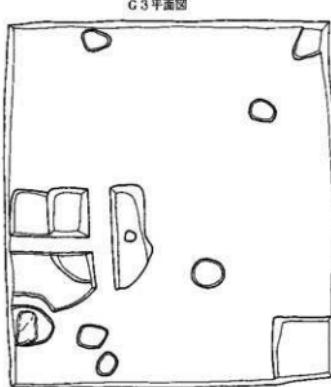


第7 グリッド平面図



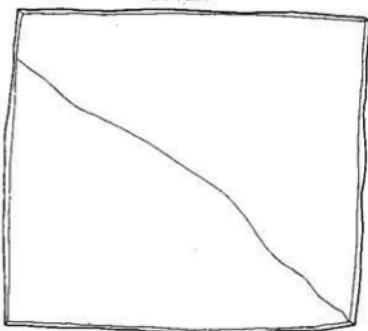
0 1 2m

第4図 グリッド平面図(1)

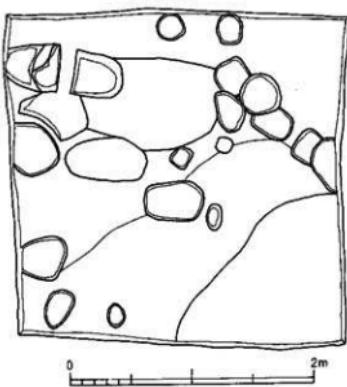


第5図 グリッド平面図(2)

G 1 平面図



G 5 平面図



第6図 グリッド平面図(3)

遺物について

遺物は主に溝跡上り出土したものが大半で、土師が大量に出土している。

小型丸底壺（図8-1）

通存の小型壺で底部はヘラ削りで整形、そこから内面くでれ部にかけてヘラ磨きにより調整し、体部内面はユビナデで調整している口縁部はやゝ内湾気味につくる。

壺（図8-2）

丸底の壺。体部は球形で、口縁部はそこからくの字形に外傾し、口縁端部は尖り気味に収める。体部中程から口縁部にかけてはコビによるナデで調整し、外面底部はハケによる調整。

台付コップ（図8-3）

塊形に脚がついた形、脚部はハの字形に開きその端部はさらに外反させた形、塊は球形に近く口縁部は僅かで端部は外反させ、その断面は三角形につくり、一ヶ所に片口部をつくる。外面はハケにより調整を主とし、脚の端部、脚の取りつけ部、口縁部をそれぞれユビによるナデによる調整を施す。また脚、塊内面にユビによるナデッケによる整形がみられ、口縁内面にハケによる調整が施されている。

壺（図8-4）

球形の体部に外反する口頸部が付されている。全体はユビによるナデが主体で、外面底部にナデマワシによる調整がみられる。

長頸壺（図8-5）

やゝ扁平な球形の体部にやゝ外反する直立気味の口頸部が付されている。口頸部はユビによるナデ調整で、頸部にヘラによる直線文が施こされている。体部外面はヘラによる磨き調整を主として行い、底部はハケによる調整を施す、円塗

小形壺（図9-6）

球形の体部に外反する口頸部をつける。全体はユビによナデ調整を主とし、外面底部はヘラによるナデツケ、頸部内面にヘラによるナデ調整がみられる。

小型壺（図9-7）

極めて小型の壺で塊に手捏ねの頸、体部は球形でそれに短い外反気味の口頸がつけられた形。全体はユビによるナデ調整で、外面底部はヘラによる面とり風の調整。

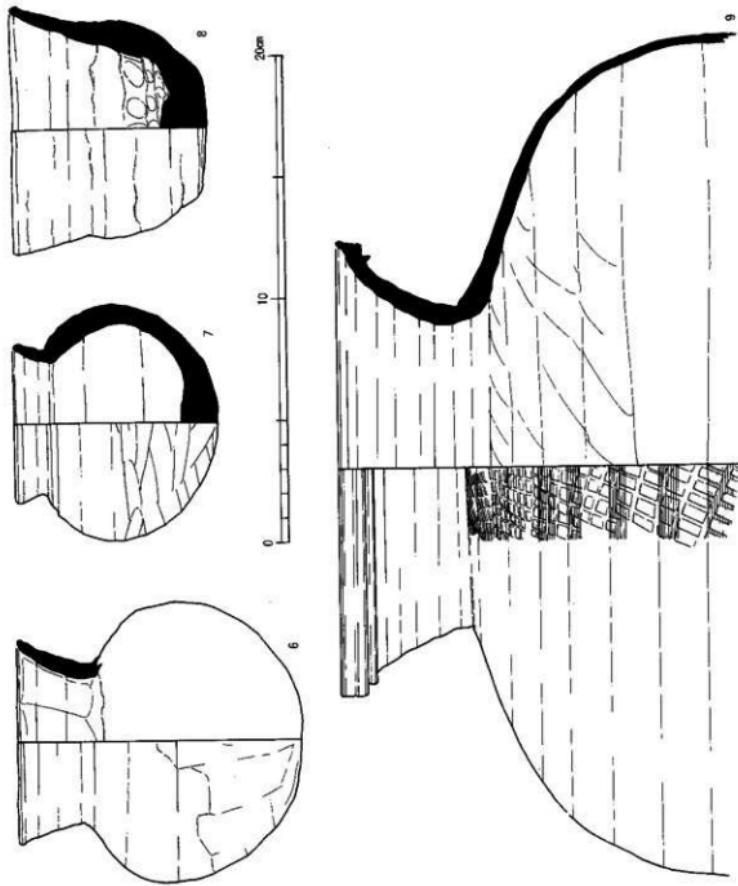
小型塊（図9-10）

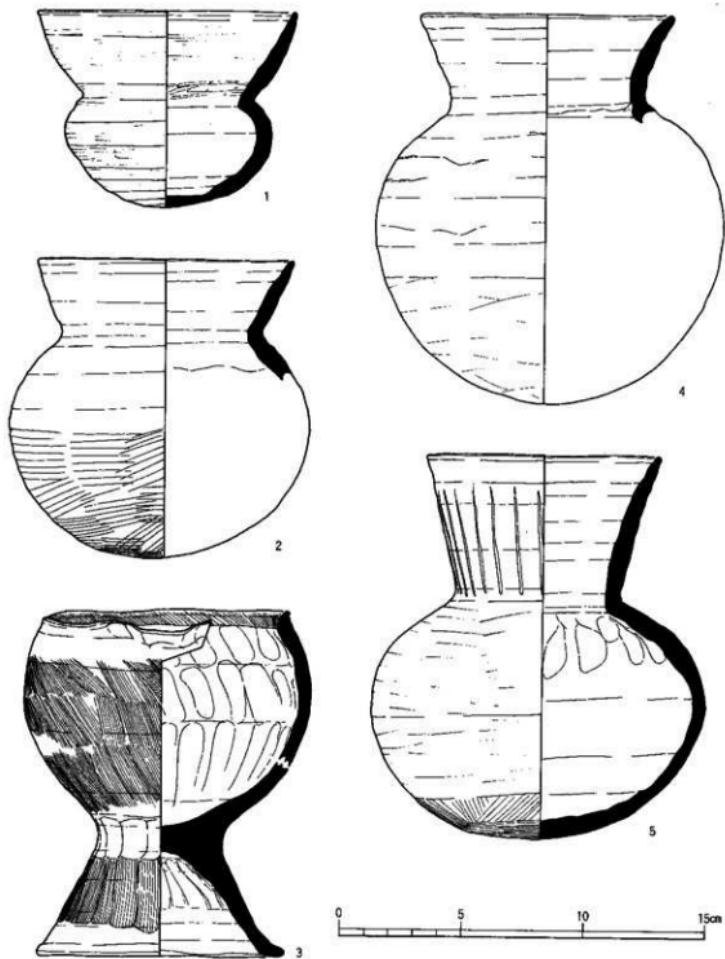
平底の小塊で塊に直線気味に聞く口頸部をつけている。全体に手捏ねによる整形。

須恵器壺（図9-11）

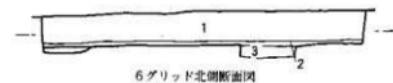
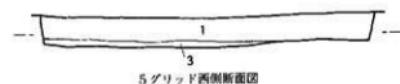
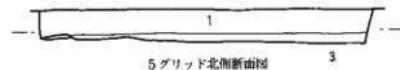
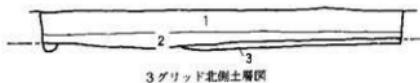
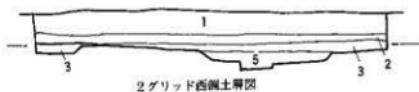
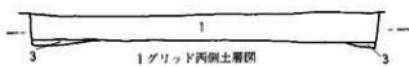
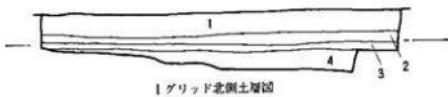
口頸のすぼまつた壺形に近い形態。口縁部は二重の口縁につくり、全体にシャープなつくり。体部は叩きのあとハケによるヨコナデが施されている。

第7图 小山遗址出土须臾器(4), 土质器(1~3)实物图





第8図 小中遺跡出土土師器実測図



第9図 グリッド土層図

溝跡内の出土遺物は図8-1～図9-10に示した如き土師器を主とし、そこに写真図版に載せた須恵器が若干混在するもの。その他、溝跡内からは勾玉形土製台、滑石製模造などが出土し、多量の手捏土師器と共に農耕に関わる水辺の祭祀が行なわれた事を示している。

(松沢 修)

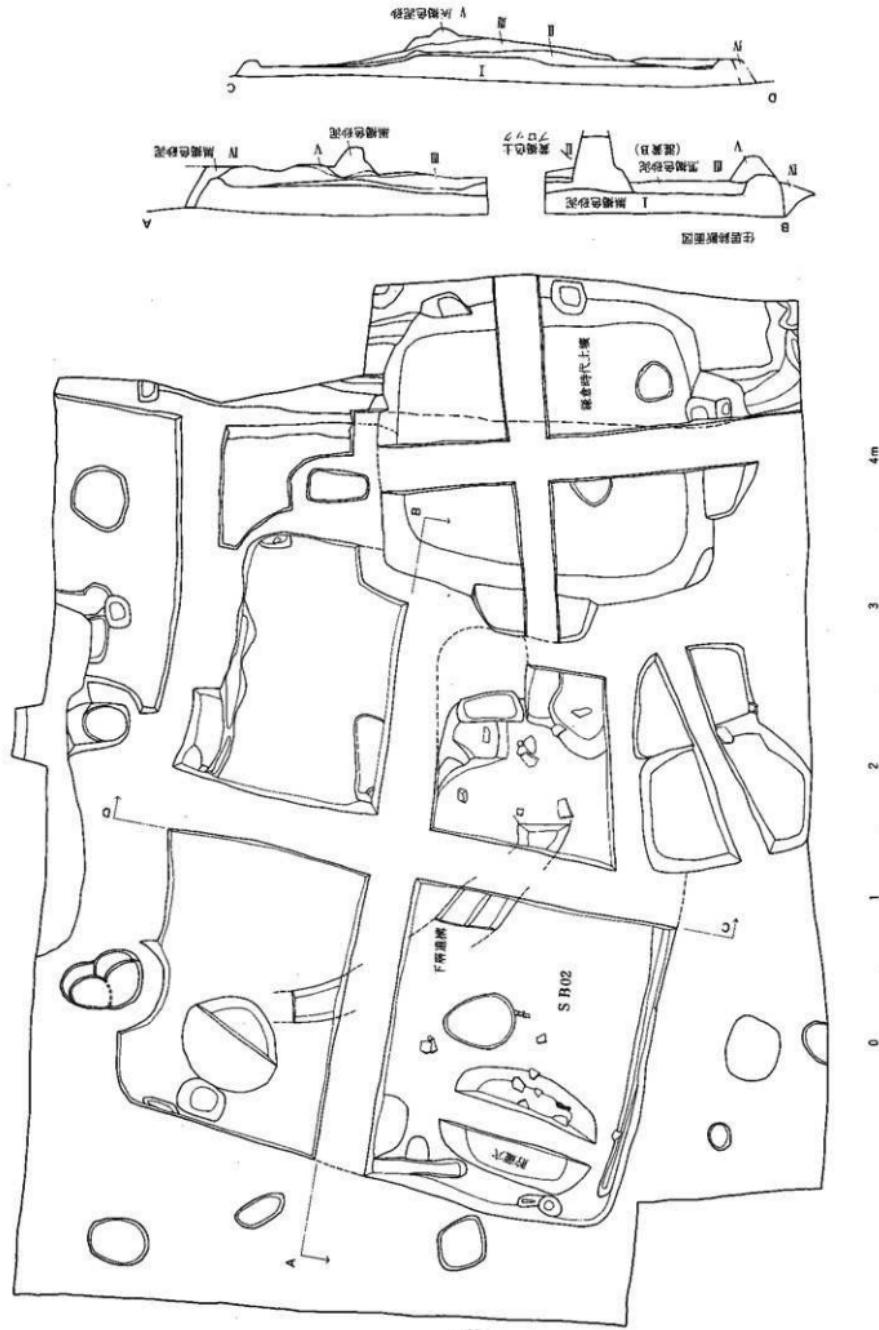
5. おわりに

今回の調査では調査範囲が水路敷と、一部帯状の狭長な削平箇所、および試掘拡と言うことから、いざれも中途半端なトレチンとなつたため具体的な遺構の全容が確認できなかつた。このため遺跡の性格については集落の一端ではあると言うことで、それ以上は言及しがたい。ただ先にも振れたように第2トレチンでの川跡の出土遺物には高坏が多く、朱塗り土器、手捏土器、滑石製品等が出土することから、付近での水辺祭祀が想像できた。このことは検出された流路の水流方向が小字中屋の湧水地方向からであり、今日でも用水を同地から引水していること、沙々木神社に接すること、南の常楽寺山古墳群の造墓期間と集落の存続期間がほぼ一致することなど、まったく想像の域を出得ないが、この一致もまた無視し得ないのでなかろうか。つまり当集落は當に古代豪族佐々貴山君の基盤であり、造墓、生産等とのかかわりの中で水辺祭祀が成されたと考えられる。

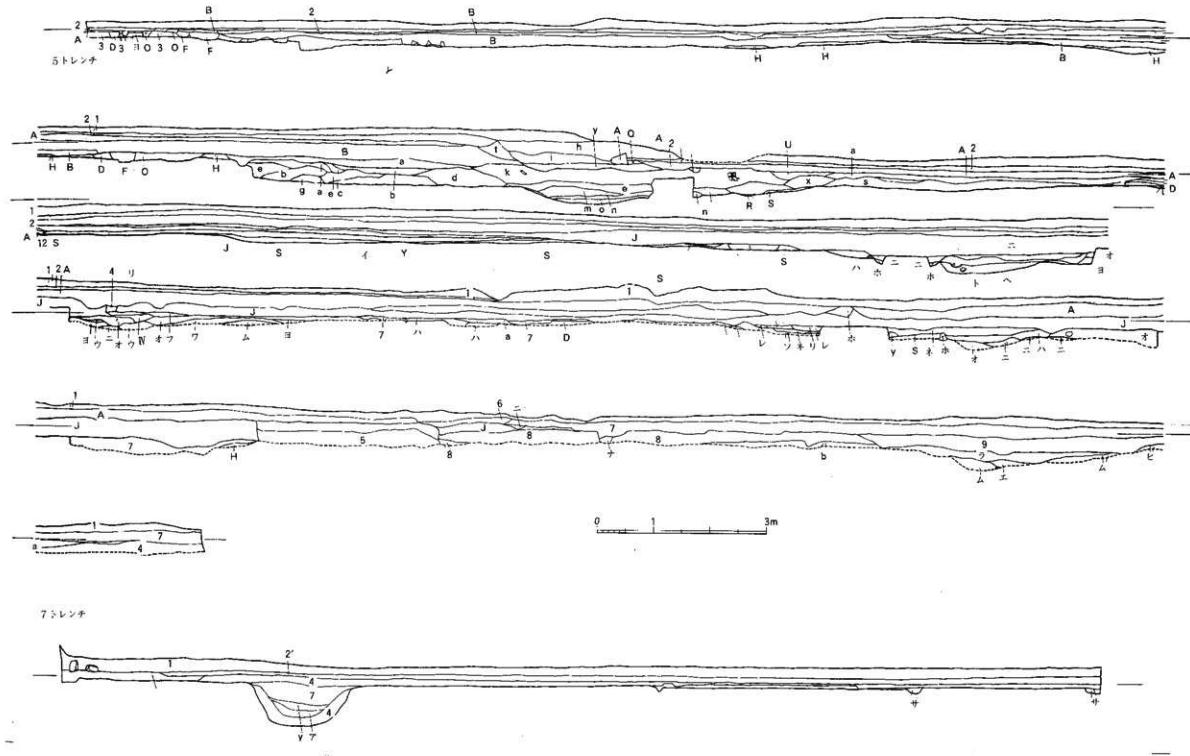
次年度以降での周辺部の調査により、より具体的な性格付けが成されるであろうことを期待し、まとめに変えたい。

(近藤 濩)

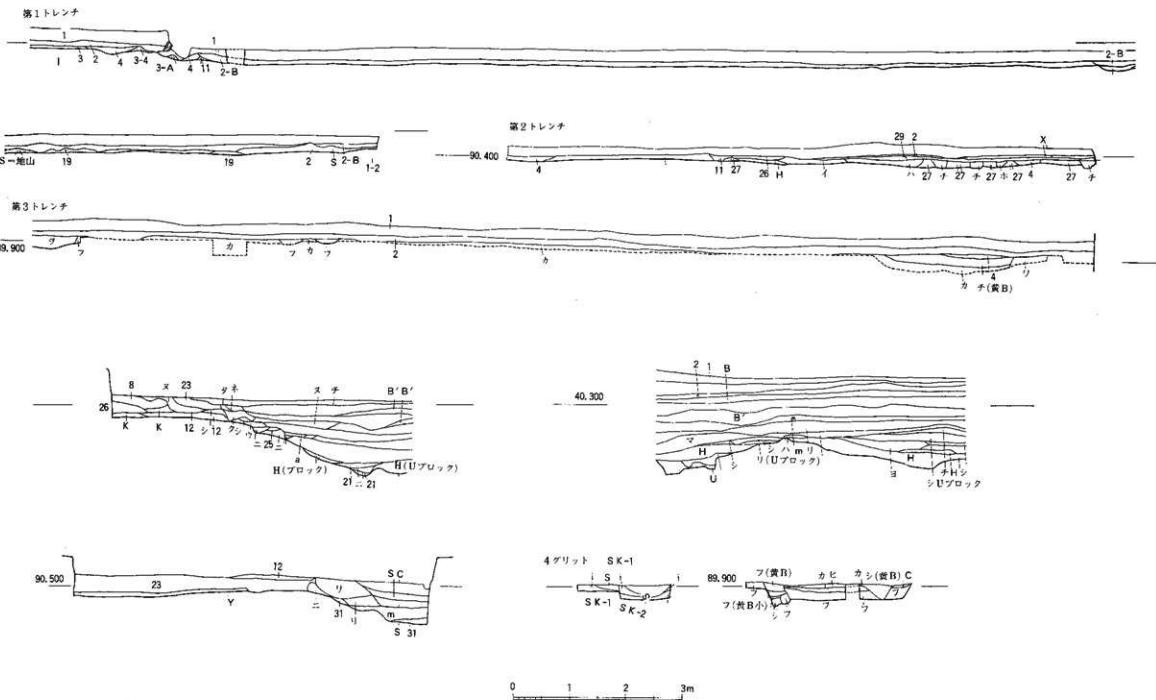
表1 トレンチ内土層名



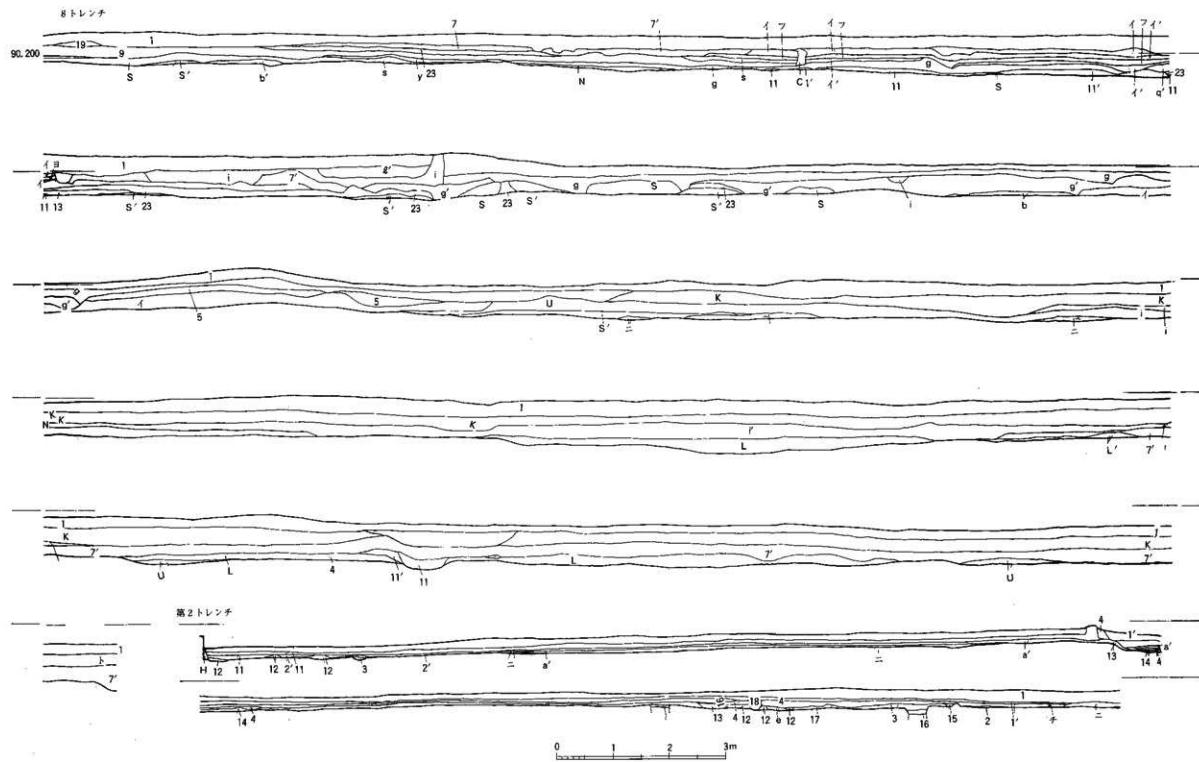
第10図 SB 0 2 穫穴式住居跡実測図



第11図 トレンチ土層図



第12図 トレンチ土層図



第13図 トレンチ土層図

図 版



1. 江上山八十六號（圖26D）



2. 江上山八十六號（圖26D）

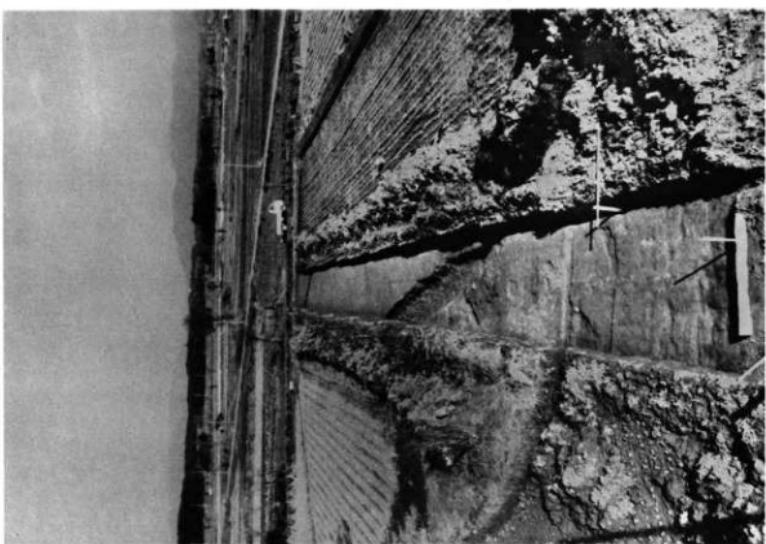


1 SD 5 遺物出土状況 (24)



2 SD 5 遺物出土状況 (16ほか)

図版三 内池遺跡



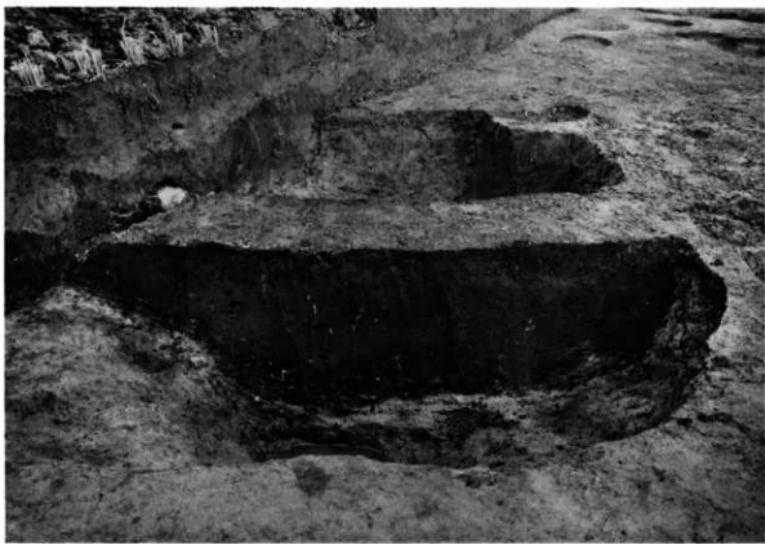
1 Hトレンチ本体部(図版6)



2 HトレンチSDI検出状況



1 コトレンチ全貌（掘り出）



2 Jトレーニ SK 3検出状況



1 JトレンチSBA I検出状況



2 JトレンチSBB I検出状況

図版六 内池遺跡



1 J トレンチ(1~9)出土遺物



2 H トレンチ(10.11.15)・F トレンチ(18.23.28)出土遺物

図版七 内池遺跡



12



27



13



17



14



16



24



19



20



25



21



26

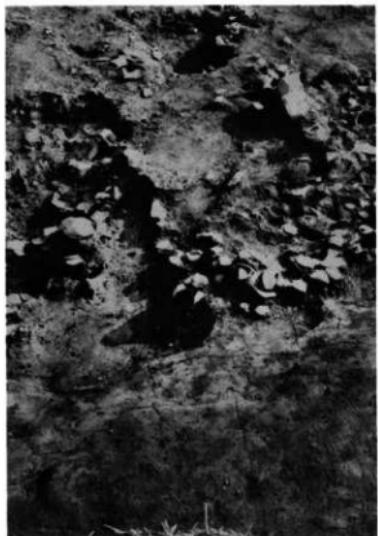


22

Hトレンチ(12~14)・Fトレンチ(16,17,19~22,24~27)出土遺物



1 漢內遺物出土狀況



2 同 上





1 溝内遺物出土状況



2 同上





1 溝内遺物出土状況



2 同上

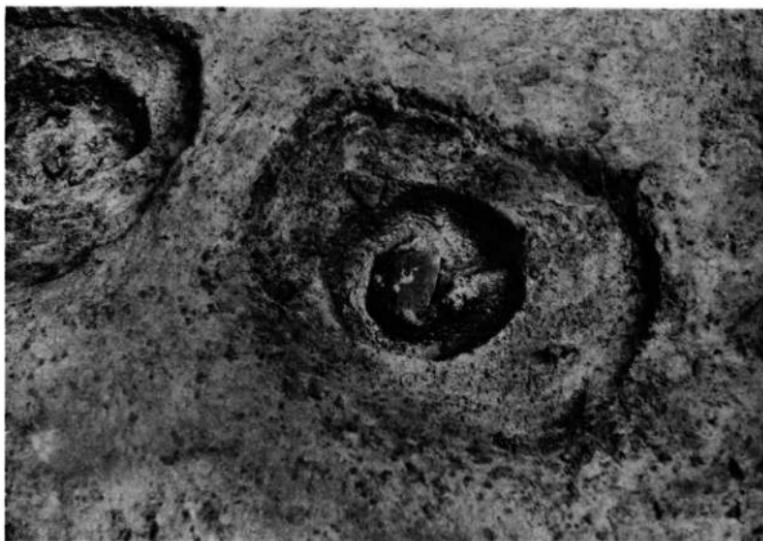




1 溝内遺物出土状況



2 トレンチ土層



1 掘立柱跡検出状況



2 掘立柱跡検出状況



1 漢內下層遺物出土狀況



2 溝跡檢出狀況



1 溝内土層堆積



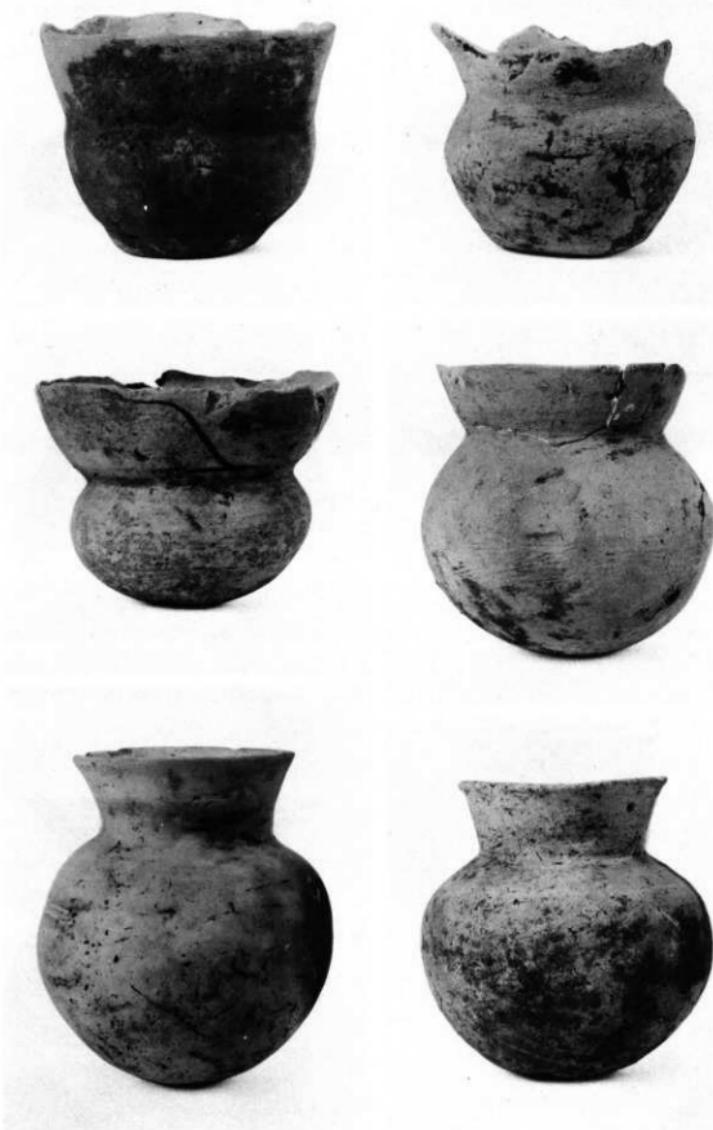
2 溝跡検出状況



1 挖立柱建物跡検出状況



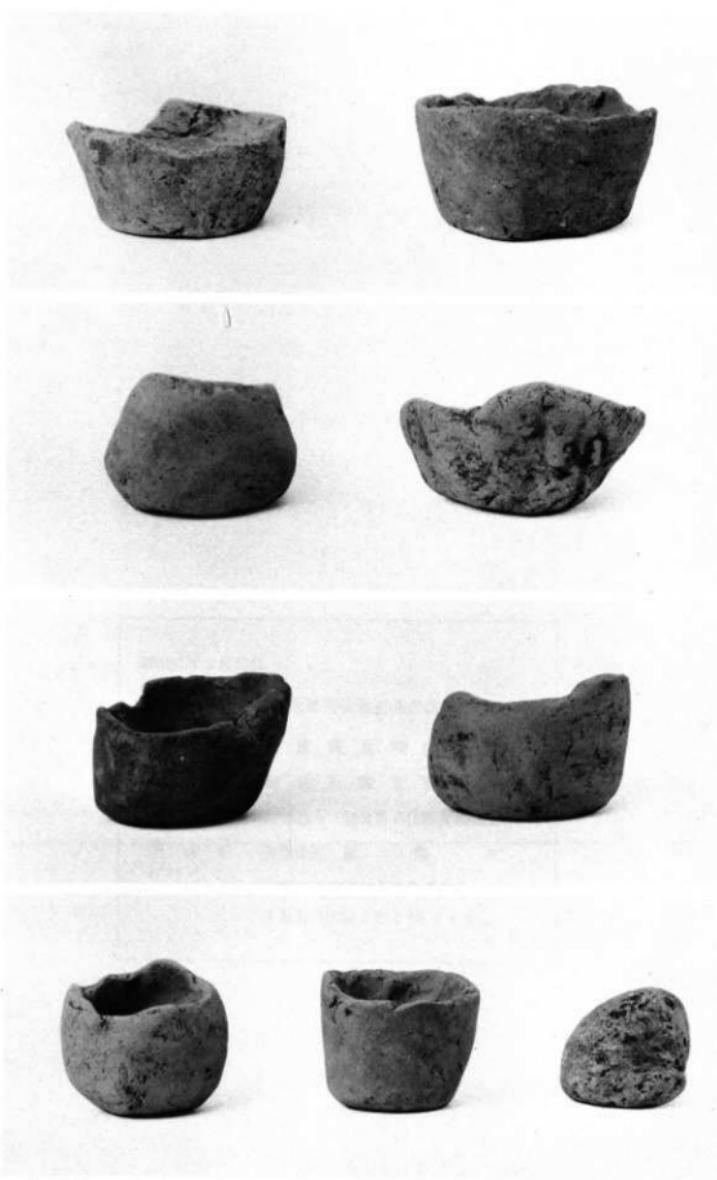
2 挖立柱跡内礎板用土器検出状況



出土遺物



出土遺物



出土遺物

昭和57年3月25日

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告IX-3

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル

TEL (075) 351-6034